

## 情 報

### 「ことばクリニック」開設の意義

伊東 節子

明倫短期大学歯科衛生士学科専攻科

保健言語聴覚学専攻

明倫短期大学附属歯科診療所, ことばクリニック

「ことばクリニック」が2004年10月1日に本学附属歯科診療所に開設された。これはことばや聞こえに障害のある患児（者）への支援のための施設であり、この開設は本学保健言語聴覚学専攻科開設以来の懸案であった。

「ことばクリニック」で扱うことばや聞こえの障害は、乳幼児から老年者にわたり、先天性にあるいは後天性に起こりうる。そのような言語障害となる原因とは歯科・口腔外科系、医科系、環境系など、多岐に亘ってみられる。

言語障害を分類して説明すると、1) 耳で聞いた特徴から、構音障害、話し声の異常、話しことばのリズムの異常、2) ことばの発達という面から、ことばの発達の遅れ、3) 原因または伴っている疾患からいえば、口蓋裂に伴う場合、脳の言語中枢の障害に起因する場合、情緒的問題で話さない場合、聴覚障害、脳性麻痺に伴う場合、声帯を失って声が出なくなる無喉頭（田口、1974）などであり、したがって言語障害の症状もさまざまに現れる。

言語障害の治療には、原因が種々にわたるためその方法に関しても、医科的、歯科的療法がとられる場合、あるいは母親指導を行い言語環境を是正する、子どもの発達に相応して能力をのばす、構音治療（いわゆる発音治療）を実施するなどがあげられる。これらの言語治療の一つに歯科医学的方法として、義歯を応用した補綴的技法があげられ、これはある場合には手術に代わる方法となるなど、言語治療の方法としては重要な位置を占めている。

言語聴覚学領域は、いまだ一般的理解にいたっていないとは言い難い状況下にある。しかし本学は歯科医療の一端を担う歯科衛生士、歯科技工士の養成校であり、また歯科診療所が併設されているというそのような環境下にある本施設「ことばクリニック」にとって、言語障害・治療について理解をえる恩恵は多大である。

したがって、本施設は歯科診療所内に開設された言語治療機関として、今後口腔顎顔面領域の異常に伴う言語障害患者の来室も少なくないと考えられる。そのような事情も考慮し、「ことばクリニック」の診療内

容・運営については、1) 口蓋裂診療班の結成、2) 症例検討会の実施を主軸とし、前者は昨（2004）年11月に既に結成された。また後者に関しても1か月に1回実施する「ことばクリニック」会議において実施している。さらに本施設の開設には本学専攻科保健言語聴覚学専攻学生の臨床実習機関としてその機能を果たすことを目的とし、これに関しても開設1ヵ月時から既にその役割を果たしている。

「ことばクリニック」の人事構成は、室長（兼任）および言語聴覚士3名（専任言語聴覚士1名、兼任言語聴覚士2名）からなる。開室以来、来室患者状況は順調である。このことは、本学理事会、教職員ならびに歯科診療所関係各位による理解・協力体制の賜であり、また専任言語聴覚士のこれまで携わってきた諸処の機関からのご協力によるものと考えている。

特に、「ことばクリニック」の診療内容の一つである「口蓋裂診療班」に関しては、世界的規模で読者を有する口蓋裂専門誌として権威のある "The Cleft Palate-Craniofacial Journal"（発行元：アメリカ）ニュースレター編集部から、昨（2004）年10月、我が国では初めての原稿依頼が著者にあった。そのため「Meirin College Cleft Palate Team, Niigata, JAPAN (by Setsuko Itoh)」と題して昨年11月、既に原稿を送っている。

したがって、本学の「ことばクリニック」の所在は、この「口蓋裂診療班」の記事が掲載される "The Cleft Palate-Craniofacial Journal" のニュースレターを通してまもなく世界中に周知されることになるであろう。それに加えて、私たち「ことばクリニック」のメンバーは地域に根ざし、地道に言語障害患者への支援を今後さらに続けていく所存であり、本施設の開設は本学にとって、また地域社会にとって、存在意義は大きいものとする。

### 日本歯科技工学会第26回学術大会開催報告

丸山 満 歯科技工士学科

去る、平成16年7月31日、8月1日の2日間にわたり、日本歯科技工学会26回学術大会が、大会長に明倫短期大学の河邊学長のもとで、新潟市の朱鷺メッセにて開催されました。開催にあたり、準備委員長に新潟県歯科技工士会会長の小浦方氏のもとで、新潟県歯科技工士会会員、新潟大学歯学部附属歯科技工士学校、本学歯科技工士学科の教員が協力し、一年前から準備

## 情 報

を進めてまいりました。

大会テーマとして「より早く より正確に より快適に」を掲げ、一般口演36題、テーブルクリニック14題、デモンストレーション17題、クリニカルケース・プレゼンテーション4題、ポスターセッション42題で総演題数は例年とほぼ同じ113演題でありました。

大会1日目は、特別講演の演者として、明倫短期大学名誉教授、東京医科歯科大学名誉教授の田端恒雄先生が、「国民が求める歯科医療・歯科技工の在り方」と題し、新技術、新材料、歯科界の展望などについて示唆に富む話をされました。つづいて、市民公開講座として前佐渡トキ保護センター長の近辻宏典氏による「朱鷺の人工増殖と野生復帰」と題してビデオの映像を交え、人生のすべてを朱鷺の野生復帰にささげ、人工増殖まで可能となった朱鷺の野生復帰プロジェクトに関するご講演がありました。

一般口演では、技術や教育、経営・経済など多岐にわたる研究発表があり、活発な質疑応答のため、時間が延長された会場もありました。テーブルクリニック、デモンストレーション、クリニカルケース・プレゼンテーションにおいては、環境、評価、生体適合性、技工器材に関する発表があり、会場に入りきれずに立ち見も出るほどの盛況さでした。また、ポスター会場においても、白熱した質疑応答が交わされていました。

大会2日目は午前の各会場での発表に続き、午後には、「チーム医療に求められる歯科技工士の役割」と題し、明倫短期大学臨床教授、佐藤補綴研究室の佐藤幸司氏を座長にシンポジウムが行われました。シンポジストには、東京都開業、歯科医師の黒田昌彦先生、新潟大学口腔生命科学専攻 顎顔面再建学講座助手、歯科技工士の渡邊清志先生、中央医療専門学校、歯科衛生士の村田隆子先生の3名で、本テーマにふさわしい方々でした。

渡邊清志先生は、「新素材、新治療法、新技工技術が歯科医療の質の向上につながる」と題して歯科技工士に求められることは、医療人としての精神、ハイレベルな技術であることから、「歯科技工技術の進歩・発展無くして、歯科医療の進歩・発展は無いと」強調されました。

引き続き、村田隆子先生が、歯科医療NGO活動で発展途上国を中心とした各国を見てこられた歯科医療の現状を、歯科衛生士という観点から、映像を交えたご講演がありました。

最後の黒田昌彦先生は、補綴学を専門とし、日常臨床でも自身が技工に携わっていること、臨床経験から

補綴には清掃性が重要であり、口腔内の環境作り、清掃性を高めるための技工、模型からわかる口腔内の診査、見えない情報の伝達が欠かせなく、それらを実現するためには、歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士間で検討し、情報を交換するチームワークが、歯科医療の向上につながると述べられておりました。

また、本学歯科技工士学科からは次のような演題発表がありました。

一般口演は、「アルジネート積層2回印象法が模型の形状に及ぼす影響 第3報 固定液の影響」中澤孝敏、「指先の器用さ及び指頭の感覚向上のための訓練法」藤口武、「クラウン製作時過程における咬合接触関係の推移—全部鋳造冠の咬頭嵌合位—」五十嵐雅子の3題、ポスターセッションは、「チーム歯科医療を学ぶための専攻科臨床実習について」丸山満、「明倫短期大学における歯科修復物の製作状況に関する実態調査」木暮ミカ、「吸水に関わるスルホンおよびレジジン床義歯の特性比較」佐野正枝、「学生評価による各種人工歯排列の比較・検討」伊藤圭一、「技工室の照度測定と照度基準との比較検討」井上篤の5題の発表がありました。

この度の学術大会の開催にあたり、準備には関係者が一丸となって取り組んだ事は言うまでもなく、十数回に及ぶ準備委員会の打ち合わせなどもあり、準備には相当の時間を要しました。特に、新潟県歯科技工士会の中村氏と、頻繁に連絡を交わしたことは鮮明に記憶しています。また、学会当日は新潟県歯科技工士会の方々、本学の歯科衛生士学科、事務局の方々、新潟大学附属歯科技工士学校と本学技工士学科の学生の協力もあり、学会は滞りなく進行できました。その中の一員としてお手伝いをさせて頂いたことは、あらゆる面で研鑽を積めた機会になりました。この度の経験をふまえて、これからも学会に参加していく所存です。

あらためて、日本歯科技工学会の発展を期待すると共に、学会の運営に携わった方々に感謝申し上げる次第です。